赤とんぼ

レベル 初中級

【原作】新美南吉
【簡約】大貝雅・松田遥花・浅野まほ
【挿絵】松田遥花

赤とんぼは、空を三回まわって、竹の上にとまりました。

山里の昼は静かです。

そして、夏の山里は、本当にたくさんの草や葉があります。

赤とんぼは、目を動かしました。

休んでいる竹には、朝顔のつるがついています。

この家の主人は、去年の夏に朝顔を植えていたので、その種がまた朝顔になったんだと思いました。

今、この家には誰もいません。戸が寂しく閉まっています。

赤とんぼは、休むことをやめて、空へ飛び上がりました。

三、四人の人が、こちらへ歩いてきます。

赤とんぼはまた竹にとまって、その人たちを見ていました。

最初に走って来たのは、かわいいおじょうちゃんでした。

赤いリボンのぼうしをかぶっています。

それから、おじょうちゃんのお母さん、荷物をたくさん持った学生さんが来ました。

赤とんぼは、かわいいおじょうちゃんのぼうしの赤いリボンにとまりたいと思いました。

でも、おじょうちゃんが怒るとこわいなと思いました。

けれど、おじょうちゃんが赤とんぼの前に来たとき、赤とんぼは赤いリボンにとまりました。

学生さんは、

「あっ、おじょうさん、ぼうしに赤とんぼがとまりましたよ。」

と大きな声で言いました。

赤とんぼは、おじょうちゃんの手が、すぐに自分をつかまえるかもしれないと思って、すぐに飛ぶ準備をしました。

しかし、おじょうちゃんは、赤とんぼをつかまえないで、

「まあ、あたしのぼうしにとまったのね！うれしいわ！」

と言って、うれしそうにジャンプしました。

つばめが、空を飛んでいきます。

かわいいおじょうちゃんは、誰も住んでいなかったあの家に住みはじめました。

おじょうちゃんのお母さんや学生さんもいっしょです。

赤とんぼは、今日も空をまわって飛んでいます。

夕日があたり、羽がいつもより赤い色をしています。

「とんぼ、とんぼ、赤とんぼ、すすきのなかは危ないよ。」

かわいい声で、こんな歌を歌っているのが聞こえてきました。

赤とんぼは、おじょうちゃんが歌っていると思い、

飛んでいきました。

歌を歌っているのは、あのおじょうちゃんでした。

おじょうちゃんは、水でからだを洗いながら、一人で歌っていたのです。

赤とんぼは、おじょうちゃんの頭の上へ飛んでいきました。すると、おじょうちゃんは、

おもちゃの魚を持ったまま、

「あたしの赤とんぼ！」

と大きな声で言い、両手を高くあげました。

赤とんぼは、とても楽しい気持ちです。

そこへ、学生さんが、

からだを洗うための泡を持ってきました。

「おじょうさん、背中を洗いましょうか？」

「いや。」

「でも。」

「いや！いや！お母さんがいい。」

「困ったおじょうさんですね。」

学生さんは、歩きはじめました。

しかし、二人の話を聞いている赤とんぼを見つけると、

手を大きくまわしました。

赤とんぼは、

「変なことをするな。」

と思って、指を見ていました。

学生さんは、グルグルと手をまわし続けます。

だんだんと、まわす大きさは小さく、近く、

そして、早くなっていきます。

赤とんぼは、目がまわってしまいました。

その時です。赤とんぼは、学生さんにつかまってしまいました。

「おじょうさん、赤とんぼをつかまえましたよ。あげましょうか？」

「ばか！あたしの赤とんぼをつかまえるなんて、山田のばか！」

おじょうちゃんは怒って、学生さんに湯をかけました。

学生さんは、逃げていきました。

赤とんぼは安心して、空の方へ飛びました。

おじょうちゃんは、良い人だと思いながら。

空はとても晴れています。遠くまできれいな青色です。

赤とんぼは、窓のところで休んでいます。そして、かわいいおじょうちゃんと同じように、

学生さんのお話を聞いていました。

それから、そのとんぼは怒り、大きなくもを食べようとして、かみました。

くもは、

「痛い！痛い！助けてくれ。」

と大声で言ったのです。

すると、小さなくもが、たくさん出てきましたが、全部殺されてしまいました。

とんぼは安心して、自分のすがたを見ました。するとびっくり。

くもの赤い血が、からだについていたのです。

これは大変だと思って、泉でからだを洗いましたが、全然とれません。

とんぼは、

「赤い色をとってほしい。」

と神さまにお願いしました。

神さまは、

「お前は何も悪いことをしていないくもを

たくさん殺したから、血の赤色になったんだ。」

と怒りました。

そのとんぼが、赤とんぼなんですよ。だから、赤とんぼは良くないとんぼです。」

学生さんのお話は、終わりました。

赤とんぼは、

「そんな悪いことはしていない。」

と考えました。

その時、おじょうちゃんが大声で言いました。

「うそだうそだ！山田のお話は、みんなうそだよ。かわいい赤とんぼは、そんな悪いことを

しないもん。さっきのお話は、みんなうそだよ。」

赤とんぼは、本当にうれしく思いました。

学生さんは、顔を赤くして、行ってしまいました。

赤とんぼは、窓からおじょうちゃんの肩へ飛んでいき、とまりました。

「まあ！あたしの赤とんぼ！かわいい赤とんぼ！」

おじょうちゃんの目は、きれいな黒色でした。

暑かった夏は、いつの間にか、終わっていました。

朝顔は竹にまきついたまま、かれてしまい、秋の虫がなくようになりました。

赤とんぼは、おじょうちゃんに会いにやってきました。

しかし、いつも開いている窓が全部閉まっていて、びっくりしました。

赤とんぼが、

「どうしたのかしら？」

と考えたとき、玄関から人が出てきました。

おじょうちゃんです。あのかわいいおじょうちゃんです。

けれども、おじょうちゃんは悲しい顔をしていました。

はじめて会ったときにかぶっていた赤いリボンのぼうしをかぶり、きれいな服を着ています。

赤とんぼは、いつものように飛んでいって、おじょうちゃんの肩にとまりました。

「あたしの赤とんぼ…かわいい赤とんぼ…あたし、東京に帰るのよ。もう、さようならよ。」

おじょうちゃんは、悲しい声で言いました。

赤とんぼも悲しくなりました。

「おじょうちゃんといっしょに、東京へ行きたいな。」

と思いました。

その時、おじょうちゃんのお母さんと、赤とんぼにいたずらをした学生さんが出てきました。

「では、行きましょう。」

みんなは、歩きはじめました。

赤とんぼは、途中でおじょうちゃんの肩から飛び、あの家にある竹の先にとまりました。

「あたしの赤とんぼよ、さようなら。」

かわいいおじょうちゃんは、何回も赤とんぼの方を見て、言いました。

しかし、だんだんと見えなくなってしまいました。

赤とんぼは、

「これから、この家には、誰も住まないのかな。」

と静かに考えました。

赤とんぼは、さびしい秋の夕方などに、あのかわいいおじょうちゃんのことを思い出しています。

やさしい日本語で読む日本文学
『あし』『赤とんぼ』

2023年3月1日発行
発行　宮城学院女子大学　学芸学部　日本文学科
印刷　株式会社 フロット

許可なしに転載･複製することを禁じます。